

わび茶と露地 (茶庭) の変遷に関する史的考察 —その 7: 宗和・みやびへの指向

浅野二郎*・仲 隆裕**・藤井英二郎**

(*千葉大学名誉教授, **環境植栽学研究室)

A Historical Consideration on the Changes of the Wabicha (Tea Ceremony) and the Roji (Tea Garden)

—Part 7: Sowa; An Approach to the Miyabi

Jiro ASANO*, Takahiro NAKA** and Eijiro FUJII**

(*Emeritus Professor, **Laboratory of Planting Design)

ABSTRACT

The Kuge-cha had been descended by court nobles besides the succession of Wabi-cha from Jyoo to Rikyu, and Oribe and Enshu. The Kuge-cha is supported by a sense of beauty of Miyabi corresponding to the Wabi-cha by a sense of Wabi. In the tradition of Kuge-cha, nevertheless, the kuge-cha have been changed with the connection to the Wabi-cha. We picked up Knanomori Sowa, who corresponded to the changes of Kuge-cha as a tea ceremonial master of Wabi-cha, and discussed his approach to the Miyabi by the analysis of his several designs like Teigyokuken and Sekkatei, and the related literatures.

1. 研究の課題

紹鷗・利休にはじまるわび茶は、新しい茶の在り方として当時の社会に受け入れられ、やがて大名茶として発展する。また、同時に、それは町衆を主とする市井の人々に育まれ、町衆文化・町人文化の一翼を担ってゆくことになる。

また一方で、このようなわび茶の展開とは流れを分けた公家の茶がある。有職故実を主軸とする伝統文化の継承の担い手をもって自ら任ずる宮廷人たちによって継承されたこの公家茶にも、しかし、時代の推移とともに、わび茶の文化とのかかわりのなかで次第に変容が見られるようになる。

この公家茶の変容に、わび茶の側から大きくかかわった人物の一人に金森宗和があげられる。この論文は、このような宗和が求め続けた茶と茶の造形、特にその露地がどのようなものであったかを、現存する作例と文献・資料を手掛かりとして検討しようとするものである。

2. 宗和・その出自と茶の系譜

金森宗和の出自を知る直接の資料は必ずしも多くはない。『寛政重修諸家譜』によれば、「金森重近 従五位下

飛騨守 号 宗和、慶長 19 年冬父が勘気をうけ京師に屏居す。明暦 2 年 12 月 12 日彼地にをいて死す。年 73」⁽¹⁾とあり、また父は可重、従五位下、出雲守で飛騨一円を領し、高山城に住した、と記されている。

佐藤は、重近が父の勘気を受けた件に触れ、慶長 19 年 (1614) 大坂冬の陣起こるや可重は台命により諸子を率いて出征したが、ひとり長子重近だけは故あって出陣の日に勘当し同伴しなかった。それは重近の言動に徳川氏に対し忌憚するような事があり、そのため父可重は彼を勘当したものであった⁽²⁾、としている。

中村は、この勘当の理由について佐藤の指摘を肯定しながらも、また別に、金森家の複雑な家庭事情が深刻化するなかで父子間の感情のもつれが生じ、それが勘当の原因になったのではないかと⁽³⁾、ともしている。

勘当の理由はともかく、勘当をうけたその年、即ち慶長 19 年、重近は京都に出、やがて大徳寺の傳双紹印 (宗印) 和尚に参禅し、入道して宗和を号することになる。なお、重近の号・宗和は師紹印 (宗印) の贈るところと伝えられる⁽⁴⁾。

金森家は代々茶道に堪能な家柄であった。宗和の祖父金森長近は従四位下 兵部卿、号を素玄、退隠して法印となる。これによって世に素玄法印、または金森法印と呼ばれる。長近は茶を古田織部あるいは千利休に学んだと言われる⁽⁵⁾。『槐記』には、彼が利休に呼ばれた折、炉

の四方を缺き、その所作を利休が評価したという逸話が見える。また、享保13年11月13日の条には予楽院近衛家熙が東本願寺に深諦院殿を訪れた茶会の折に金森法印(長近)の茶杓が用いられていたことが見え⁽⁶⁾、長近の茶および彼の茶の造形に対して高い評価が与えられていたことが知られる。

宗和の父金森可重は出雲守であるところから金森出雲(守)と呼ばれるが、後世しばしば上記長近と混同されることがあった。金森出雲は茶を千道安に学び、後に將軍秀忠の師範の役をも努めるに至ったとされる⁽⁷⁾。また、『長閑堂記』には「古田織部殿の時代は、金森出雲殿もつとも目ききの巧者たり」⁽⁸⁾と記されていて、織部・遠州の時代、金森出雲が既に優れた茶人として認められていたことが知られる。

慶長4年(1599)2月23日朝、松屋久好は金森出雲守の伏見屋敷における茶会に招かれた⁽⁹⁾。この茶会は中柱つきの長四畳で行われたものであって、この記録から路地(露地)は広く、芝生が張られていたり、ボケなどが植えられていた様子が知られる。また、久好は同年3月6日、織部、遠州らおよそ30人ほどで行われた吉野の花見について書き記して⁽¹⁰⁾、この一行の中に金森出雲守が加わっていたことが知られる。これらの記録から、この時期、金森出雲が織部・遠州をはじめ奈良・堺衆と広く交流していた実情を推しはかることができる。

宗和は慶長19年、父の勘気を蒙り京都に屏居するまでおよそ30年間、優れた茶人として世の評価を受けるほどであった祖父と父のもとに在ったことになる。しかし、この間における宗和の茶について残された資料はほとんど見当たらない。天正19年(1591)利休賜死の際、道安はかねてより利休と親しい間柄にあった金森法印長近を頼って高山に身を寄せることになる。恐らくこの時期、宗和の父可重は直接道安の茶に親しく接したものと思われる。年少であった宗和もまた、このとき道安の茶について学ぶところが少なくなかったのではなかろうか。後に宗和が己の茶について「自分の茶は道安の流れを汲むもの」⁽¹¹⁾と語ったのは、おそらく、この辺の事情をもってする言辞とみてよいのではあるまいか。

宗和はその幼年期を祖父長近と父可重という二人の優れた茶人の膝下で過ごし、さらに彼の少年期・天正19年には計らずも千道安をこれに加える環境の下で生活するという、茶人・宗和として育つためにはこの上ない条件が与えられることになる。このとき、道安から長近、可重に少年宗和のもつ優れた茶の素質についての評価が、あるいは語られたかもしれない。但し、この推測を直接証拠だてる資料は今のところ見当たらない。

慶長19年大坂冬の陣に際し、その出陣の日、既に触れ

た如く宗和は勘当され可重に同行しなかった。『金森家譜』『金森先祖書』『金森流傳來』『飛州史』『寛政重修諸家譜』など何れの資料もこの事実について記述しているが、この理由については詳しい記録がない。諸資料とも、ただ「父が勘気をうけ」「父ト不和ニ付」「有レ故」などとあって勘当の事由を明示していない。しかし、『金森先祖書』⁽¹²⁾に誌される「存寄有レ之」の一句には他の資料にはない一種の重みを感じられる。

慶長19年当時、一族を率いる領袖にとってみれば、東西いずれに付くかは一族の将来を大きく左右する一大問題であった。このとき重近は青年武将として、一方の旗頭を努めるまでになっていたはずであり、城主としての将来も見えていたはずである。可重はこの難局に当たって、金森の家系を確保する非常の手段として嫡子重近を武家の世界から市井の庶民とする道を選んだのではあるまいか。そして、それは同時に父祖伝来の金森の茶系を、このすぐれた茶の素質を持つ吾が子重近に託したのではあるまいか。勿論、この推測を支える史料はない。また、この推測は上述の佐藤、中村両氏の提示した推測を否定するものでもない。

慶長19年、京都に出た重近は大徳寺において修禪、やがて居を構える。川島は、『古久保家文書』寛永20年12月13日の「上下京牢人御改帳留」の一節に「一、御所八幡上半町 金森宗和/右者式拾五年以前より当町二居被申候、但、御切手御座候」とあることから、宗和は元和4年(1618)より御所八幡町(現在の京都市上京区烏丸今出川上ル西側)に屋敷を構えていた⁽¹³⁾、としている。ここは禁裏や近衛邸にごく近い場所であった。寛永15年(1638)正月28日、松屋久重は中沼左京らとともに、この屋敷での宗和の茶会に招かれている⁽¹⁴⁾。このようにして、宗和は茶人としての活動を展開することになるが、その茶風は「古田織部流ヲ根本ニシテ小堀遠州ヲ指加(さしくわえ)自分ノ物好奇少宛仕替⁽¹⁵⁾」たものであったが、先述のごとく、自らは千道安流と称していた。

さらに、宗和の茶を特徴づけるもののひとつに、彼の活動範囲をあげることができる。それは彼が当時の宮廷貴族に歓迎され、これら数多くの堂上人と親交を結びつつ、宮廷人たちがそれまで維持してきた貴族茶の趣向に大きな影響をもたらした点である。禁中・公家の茶の世界でもっとも注目すべきは後水尾帝の弟君にあたる常修院宮慈胤法親王である⁽¹⁶⁾。親王は宗和の茶系をひく人物であり、この常修院宮から茶道の伝授を受けた人々として後西院、真敬法親王、近衛家熙らを挙げ得る。このようにしてみると、宗和の茶と禁中・公家の茶との関わりが如何に広いものであるかを窺うことができよう。而して、宗和におけるこのような茶の世界は何故、何時、

如何にして形成されたか。この点に深く関わる人物として中村は安楽庵策伝を挙げている⁽¹⁷⁾。

安楽庵策伝は『醒睡笑』の著者として著名であり、これまで宗和の弟であり茶の弟子であると伝えられてきた。『醒睡笑』の序に元和元年（1615）70歳で誓願寺を退き、同寺の西北隅に隠居し安楽庵と号したとしている⁽¹⁸⁾。この隠居所は同寺の塔頭・竹林院であり、偈安堂と号する茶室を設けていた。

この茶室は、寛永6年（1629）6月5日、松屋久重が策伝の茶に招かれた折の茶室と見られるもので、会記に「古織部殿時ノ三疊大」と記されるものである⁽¹⁹⁾。この茶会には鎖の間も使われていた。

『都名所図会』は策伝の創建した竹林院について「庭中の風景絶倫なり」とし、茶室に「遠州好」としていたから⁽²⁰⁾、この時期、誓願寺には織部の茶室と遠州好みの茶室とがあったのかも知れない。あるいは会記と都名所図会の何れかが誤り伝えているとも考えられるが、この問題はしばらく措く。

誓願寺法主策伝は後水尾帝の勅命により宮中で曼陀羅を講じ、元和9年（1619）には紫衣が勅許されている。さらに園芸学上注目すべきものとして『百椿集』をあげねばならない。これは寛永7年（1630）策伝77歳のときの著書で、彼自身が蒐集した椿、あるいは当時の名品百種について、白玉・赤椿・咲分・替物などに分類し、その命名の由来、花色、花形を克明に記載した一書であった。

策伝は上に瞥見したごとく、紫衣勅許の法主としてはもとより、文学、茶道、園芸など広い分野で活躍し、遠州、松花堂をはじめ近衛信尋、光広など多くの公家たちとも親しく交際したすぐれた文化人といえる。中村は、策伝の茶人、さらにより広く文化人として作り出していたこのような環境が、宗和の茶と彼の茶人としての活動に大きな影響を与えたに違いない、策伝こそ茶匠を志す宗和の直接の先達ではなかったか⁽²¹⁾、としている。

ところで、策伝の出自について、立政寺歴代大年譜および浄音寺過去帳から彼・策伝が宗和の祖父金森長近（金森法印）の弟であることが明らかにされ、これまでの言い伝えであった宗和の弟ではなく、宗和のいわば大叔父に当たることが解った^(22,23)。ただ、鈴木は策伝と宗和の交渉を裏付ける資料が見当たらない⁽²⁴⁾とし、このことから二人の交渉に疑問を投げかけている。ともあれ、宗和と策伝のかかわりには不明な点が多いけれども、宗和の茶と彼の茶人としての活動を考えるうえで、この二人の交渉のあり方は極めて重要な問題を含むものである。それだけに、この問題は今後に残された大きな研究課題と言わねばならない。

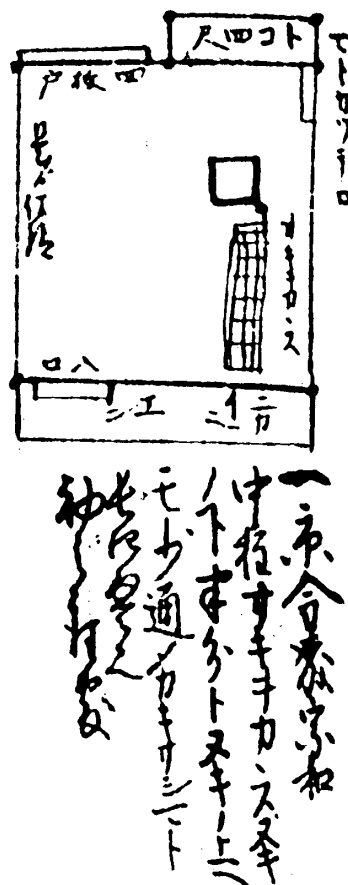
3. 宗和の茶室と露地

(1) 宗和屋敷

さきに触れたように、寛永15年（1638）正月28日、松屋久重は、中沼左京らと宗和の茶会に招かれている⁽²⁵⁾。この茶会は御所八幡町の屋敷につくられた「二カイ座敷」（二階座敷）で催されたものである。松屋会記によれば茶室は長四畳、「ウシロ床」（下座床）、中柱を立て、二重棚をつつていた。

『茶湯秘抄』には、「京 金森宗和、長四畳也」の標題を付した図が示されている（第1図参照）。この図によれば、四尺床の正面には縁が付けられ、床とはぐいちのかたちで「入口」（にじり口か）が設けられていた。床正面に炉が切られ、床に向かって右手には「カッテ口」（通口）がつけられていた。この図には更に「初之座敷」と注を加えていたから、おそらく、宗和が京に屏居すべく御所八幡町に屋敷を構えて、最初につくった茶座敷とみてよいものであろう。

この茶座敷は、前述の慶長4年2月23日宗和の父・金



第1図 宗和屋敷 長四畳

（東大寺図書館蔵、茶湯秘抄より）

森出雲が久重の父・久好を招いて催した茶会⁽²⁶⁾における茶座敷と、たとえそれが二階につくられたものであったにせよ、まことによく通うものがあるように見受けられる。久好の記録によれば、可重伏見屋敷におけるこのときの茶座敷は「長四条（畳）御座敷」で中柱を立てた構えであった。この双方をみると、寛永15年正月のこの茶会は親と子それぞれに代が替わりこそすれ、その茶座敷は宗和の父・可重が好んだ長四畳、中柱構えに通じるものであったことが知られる。これは奇しき因縁というよりは、むしろ両家は長い付き合いが、あの大坂の大乱を挟んでもなおかつ継続していたことを雄弁に物語っているというべきであろう。さらにいえば、この宗和長四畳茶座敷は彼宗和が父可重の茶を、ある点で継承していた証左とみてよいのではあるまいか。

正保4年（1647年）卯月（4月）3日の晩、久重が不時（突然）に尋ねた折に催された茶は、久重の記録中に書き留められた指図⁽²⁷⁾から六畳敷で間中ほどのエン（縁）を付設する茶座敷であった（第2図参照）。茶室のほぼ中央、床寄りには「イロリ」（炉）が切られた本勝手で、床脇には杉棚が配られ、棚の下段には鉄の双花瓶が飾られるという趣向であった。床かざりについては、既報その4で述べたので、ここでは触れない。図には茶室への出入口が明示されておらず、確かなところは解らないが、あるいは遠州が深くかかわったとされる松花堂昭乗の滝本坊に営まれた、あの茶室・閑雲軒の寄り付き⁽²⁸⁾に通うものであったかもしれない。

翌正保5年（1648）3月25日、久重は3人の相客とともに宗和の茶会に招かれる。このときの茶座敷は挿図によって「三条大」（三畳台目）であったことが知られる。このときの茶座敷と露地については既に論じた⁽²⁹⁾。

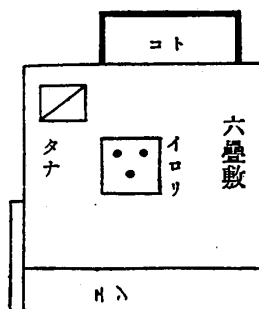
以上の記録から、宗和の京都御所八幡町屋敷には、二階の長4畳を含めて少なくとも三つの茶座敷があったといえる。中村は、これらの茶室のなかで最も主要な茶室として使われたのは、この三畳台目の茶室ではなかった

ろうか⁽³⁰⁾、としている。

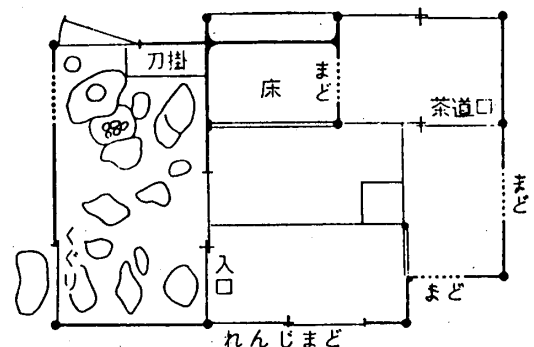
（2）庭玉軒

庭玉軒は、大徳寺の塔頭・真珠庵の書院・通徳院に付属する茶室である。この茶室・庭玉軒は金森宗和の好みとして広く知られているが、しかしそれを証する確かな史料はない。ただ、真珠庵所蔵の『御上使井伊掃部殿御巡見雑記』（文化15年；1818）や『大徳寺世譜』（嘉永年間）に「囲金森宗和好」とみえる。また『楽翁起し絵図』と通称される松平伊豆守が蒐集した『起し絵図』（東京国立博物館蔵）の中の「真珠庵図」には「……写宗和好之囲真珠庵ニアリ」とみえる。これによれば、楽翁が著名な建築の資料を広く蒐集していた時期、宗和好みの茶室の写しが真珠庵に造られていたことになる。

ともあれ、この茶室・庭玉軒は二畳台目の茶座敷とその南前面に取り付けた片流れの屋根で覆われた“内坪”によって構成されている。即ち、この内坪の構え「内つくばい」と二畳台目の茶座敷を結合したところに庭玉軒の特色が見られる。いささか穿った見方をすれば、雪国飛騨育ちの宗和が、その生活体験のなかから生み出した構成といえるかも知れない。庭玉軒にみる「内つくばい」は、土壁にあげられた潜りを入ると、そこは2坪足らずの土間で、この土間には飛石が打たれ、躊躇から刀掛さらに上り口へと導かれる構成を取っていて、壁を以て閉ざされたこの空間は文字通りの内露地のかたちで、これに先行する外露地とは全く対比的な空間をつくり出している（第3図参照）。つまり、この内坪は露地の中潜を極端に茶室に引き寄せ、中潜から茶室までの空間、即ち内露地を屋根で覆うことによって作り上げた空間構成とみることが出来る。あるいは土庇の構成をさらに発展させた空間構成とみる立場もあろう。いずれの立場をとるかにはしばらく措くとして、宗和は自邸の三畳台目露地において、既にこの手法の先駆ともいえる手法を試みていた。但し、三畳台目の場合、内露地の片側は壁なしの開放空



第2図 宗和屋敷 六畳
(茶道古典全集 第9巻・松屋會記より)



第3図 庭玉軒平面図
(中村昌生；茶匠と建築より)

間であり、中潜とにじり口とが組合わされていた。庭玉軒の場合、ここではにじり口ではなく引き違いの腰障子のいわゆる「貴人口」のかたちをとっていた。この茶室は二畳台目ではあるが、「貴人口」とこの「内坪」の取り合せのために、にじり口の茶室にくらべて一種の広さを感じさせる。それは「イカニモ緩々広ク」あるべきとする宗和の趣向に通ずる構成というべきであろう。

「岩倉宮様御庭ニ金森宗和園有之」と注記された茶座敷の図がある（第4図参照）。図によれば土庇の右端に寄せて「にじり上り」（にじり口）があり、この反対側に「上り口」があったから、ここでは「にじり口」と「貴人口」の双方を用いるかたちをとった御茶屋であったことが解る。ただし、ここでは「躊躇」がどのように配置されていたのかは不明である。いま、宗和の作例を通覧するとき、自邸三畳台目の土庇とにじり口、岩倉殿御茶屋の土庇とにじり口及び貴人口、庭玉軒の内坪と貴人口という露地における寄り付きと茶座敷の関係の展開がみられる。即ち、土庇形式から内坪（内つくばい）への流れと、「にじり口」から「貴人口」への展開とを考え合わせると、宗和自邸三畳台目→岩倉御殿園→庭玉軒の順で宗和の造形の試みが展開したもののように見受けられる。宗和の

造形の発展の経過をこのようにとらえるとき、この岩倉御殿の資料は、宗和の造形の発展・展開を検討するうえで、まことに貴重な資料と言わねばならない。

岩倉殿については、故・森蘊博士の研究によって、その全体像と利用の実態、および岩倉殿と修学院離宮の造営とのかかわり等その詳細がほぼ明らかにされた。

岩倉殿は東福門院を生母とする女三宮顯子内親王の山荘である。父君後水尾上皇は修学院離宮造営に先立って、一再ならずここ岩倉殿に御幸された。この岩倉御幸の様子の一端は鳳林承章の『隔蓑記』によって知ることが出来る⁽³¹⁾。『隔蓑記』慶安元年（1648）2月22日の条に「今日岩倉江御幸也……所々之御茶屋、種々御催也。山上拾町余有之……山上之御茶屋、種々御飾道具、驚目者也……」とあって、山荘内の見どころ多い場所を選び、その所々にふさわしい御茶屋が設けられていたことが知られる。図に残る宗和園も御山荘内の所々に設けられたこれらの御茶屋のひとつとみてよいであろう。

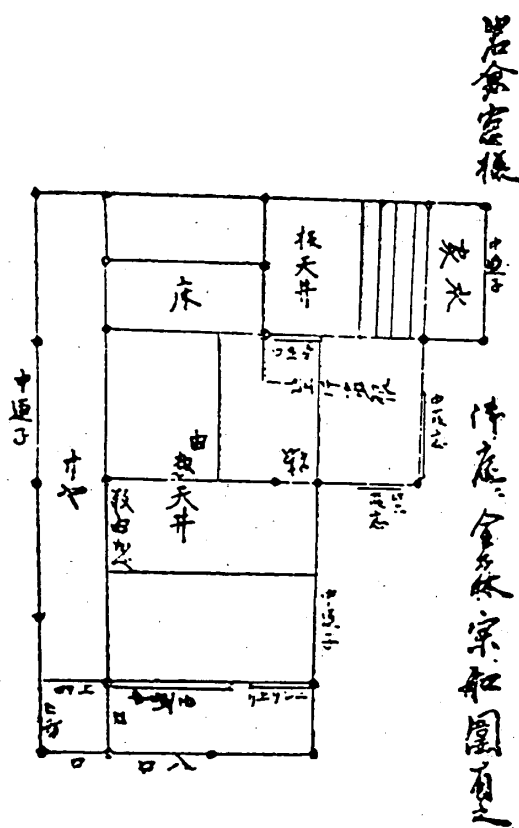
（3） 恵観・西賀茂山荘

一条恵観は後陽成帝の第9皇子で一条家に入り、兼退と称し、のち昭良と称した。慶安5年（1652）剃髪し恵観と号した。恵観は寛永18年（1642）、舟山の麓・西賀茂に山荘を営む。

鳳林承章は正保3年（1648）11月3日、西賀茂山荘で催された恵観の茶に招かれているから、この時期には山荘が完工していたものとみられる。この時の鳳林承章の日記『隔蓑記』に「午時前西賀茂、則先、於書院、而御方御所中納言殿掛御目、御礼申上也。大御所御対面、御咄之中、周南翁伺公也。御茶之湯、於御数寄屋而也。……」とあって、御数寄屋で茶の湯が催されたことが知れる。西賀茂御有増図によれば、山荘は、御寝間、御居間を主とする御殿とその南に建つ御茶屋から成り、これらを長い渡廊で結んでいたことが解る。この北側に建つ御殿には書院床を持つ長六帖（8畳）の御数寄屋が明記されている（第5図参照）。従って、『隔蓑記』の記録からはこのときの「茶」が長六畳の御数寄屋での茶であったか南側に建つ御茶屋での茶であったかを明らかにすることはできない。

中村は、この点について、この図の南側に建つ建物が鳳林承章の記録にある“御数寄屋”に当たるものと推定している。これは、この建物が山荘における茶の施設として、最も中心的な施設と見られることによるとしている⁽³²⁾。

この山荘は、やがて恵観の次男・醍醐冬基に引き継がれるが、醍醐家五代・冬香の残した記録『温故録』（写；醍醐家蔵）には「二階の袋棚其前の下地窓なんとハ金森宗和の物好と申伝たり……」とあって、宗和の好みとみ



第4図 岩倉殿宗和好み園の図
（中村昌生；茶室の研究より）

られている。また、この『温故録』には「南の庭（御茶屋の南庭）へいては伝の石（飛石）とものものすきみな宗和にて待るとそ」と見え、宗和のかかわりを物語っている。

一条恵観と宗和のかかわりについては『槐記』享保18年（1733）9月11日の条に、恵観公が宗和を召され、台子所望の折、宗和の措置に感じ、以後恵観が宗和を信じた挿話が述べられていて、西賀茂山荘の造営に際し宗和が深くかかわっていた可能性を示唆する。

佐藤は、宗和の茶室と称するもののうち現存するものが4例あるとし、その中の1例に京都・醍醐候爵別邸鎖の間を挙げている⁽³³⁾。『温故録』では長四畳を「くさりの間」としていたから、佐藤のいう鎖の間とは即ち、この長四畳を指しているといつてよい。

以上に見られるように、この長四畳は西賀茂山荘における中心的茶座敷であったし、宗和好みのものとして伝えられていたことが知られる。

（4） 夕佳亭

『楽翁起し絵図』の一葉に「北山鹿苑寺ニ有之金森宗和好茶室建地割」と表書きされた起し絵図がある⁽³⁴⁾。ここにいう鹿苑寺とは、言うまでもなく足利義満の別業・北山殿が彼の死後寺に改められたものを指す。鹿苑寺は応仁の乱によって兵火をうけ、庭園も荒廃したが、その後、住職鳳林承章の熱心な補修により旧規に勝る姿に整備されたという。

夕佳亭は、金閣を巡るようにして広がる鏡湖池の北方台地の崖際に建つ茶亭で、亭の西北方には竜門瀑の水源でもある安眠沢が広がる。

鳳林承章は文禄2年（1593）、勸修寺晴豊の第6子として生まれ、慶長16年（1611）8月、鹿苑寺の住職になっ

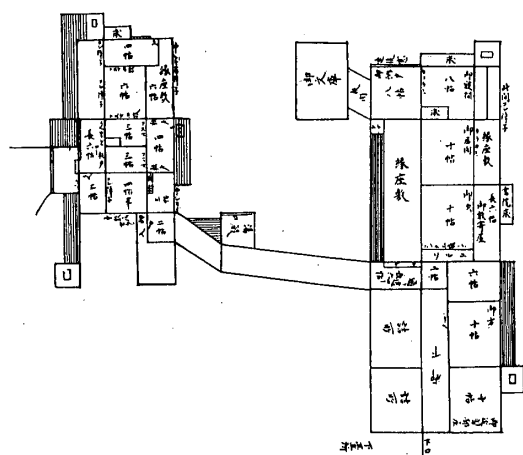
ている。宗和の名が『隔蓑記』に初めて見えるのは寛永14年（1637）9月15日の条である⁽³⁵⁾。なお、宗和は鳳林の住持在任中の明暦2年（1656）に亡くなっている。いま、この夕佳亭が宗和の好んだものとすれば、それは荒廃した庭園を見事に修復したとされる鳳林承章の時期に重なるものとみてよいであろう。

さて、『隔蓑記』は、この寛永14年9月15日午時、宗和が後陽成帝第4子・近衛応山（信尋）、御相伴・小川坊城俊昌（鳳林承章の兄弟）のお供のひとりとして鹿苑寺に鳳林和尚を訪ねたことを伝えている。当日の主賓・近衛応山と宗和の出会いはこれより早く、小笹⁽³⁶⁾によれば応山の日記では寛永6年（1629）12月の条における宗和の名が初見であるとされる。

この日以降、『隔蓑記』の中に宗和の名が折に触れて散見されるようになり、鳳林承章と宗和の間には極めて密接な関係が成立していったことが知られる。

応山が来訪したこの日の記録には、さきに触れた客組みに次いで、「先於茶屋、雲門、西水、点鳳団……」とあり、茶屋において鳳団と呼ばれる極上の団茶が点てられた。しかし、このとき用いられた茶屋が夕佳亭であったか否かは、この記録からはわからない。

『隔蓑記』によれば、鳳林承章はこれより先、寛永13年（1636）4月に書院の新築を終えていた。即ち、『隔蓑記』寛永13年4月28日の条によれば、「午時於北山、招



第5図 西賀茂御殿有増之図
(中村昌生；茶室の研究より)



写真 夕佳亭入口面外観
(堀口捨己監修；茶室起し絵図集第7集より)

仁英・興宗・貞首座・需首座・寅蔵王……点茶，為見書院新築也」とあり，鹿苑寺に仁英らを招いて茶をすすめたが，この御茶はこのたび新築した書院を披露するためのものであったという。先に触れた鳳林承章の園池補修の工事も，おそらくこの書院新築工事と前後するものであったであろうし，茶屋の新築もまたこれらの工事と一連りのものではなかったかと推測する。

鳳林承章はこの11月11日江戸に下り，翌14年(1637)3月3日帰洛する。この江戸下向には，あるいは鳳林承章の長年の懸案であった鹿苑寺の建築，庭園の整備もほぼ完了の見通しがつき，幕府への謝礼の目的をも含む下向であったかも知れない。

鳳林承章は帰洛後の7月5日，勸黄門（勸修寺経広），小坊相公（小川坊城俊冒）ら近親者を招き，茶のもてなしや茶屋での酒宴をひらき，さらには山上までも案内していたから，おそらくこの頃すべての工を終え，その出来栄を近親者に披露したのではあるまいか。このように推測するのは，『隔蓑記』によると帰洛後の5月21日，鳳林承章は半井琢庵を賀茂柳芳軒に訪ね，その見事な新造の庭園と茶屋を実見している。このことから推して，この時期，鹿苑寺の工事は最終の仕上げ段階に近づき，なお各所に対して鳳林が吟味を重ねていたものと考えられるからである。

やがて内外・巨細の工すべてを終え，輪奐相整った鹿苑寺に板倉周防，永井信濃ら幕府要人を迎えることになる。即ち，『隔蓑記』寛永19年（1641）11月6日の条に「今日，板倉周防殿……金閣見物来臨。予亦璉也召連，出迎。於閣，相对。各自淹，到茶店，被遂遠覧。各褒美不斜。板防州殿別而感入，道中之躰・茶店之様子殊勝之由，被申也」としていた。この記録から高台に建つ茶店から客達が遠望したことがわかり，ここに云う茶店が今日に伝えられる夕佳亭であることを想起させる。しかし，『隔蓑記』には茶屋あるいは茶店が持つ具体的構成，外観などに関して記すところが全くない。

中村によれば，夕佳亭について記されたものが見られるようになるのは江戸時代中期頃からである⁽³⁷⁾。即ち，『山州名跡志』『都名所図会』『都林泉名勝図会』など多くの資料を挙げ得る。

『都林泉名勝図会』巻四では鹿苑寺庭園の姿を3頁にわたって掲載し，この中に夕佳亭をかなり詳しく描き出していて，草葺四柱造の母屋と，これから斜めに掛造りに突出した切妻屋根の上段の間の様子がわかる（第6図参照）。

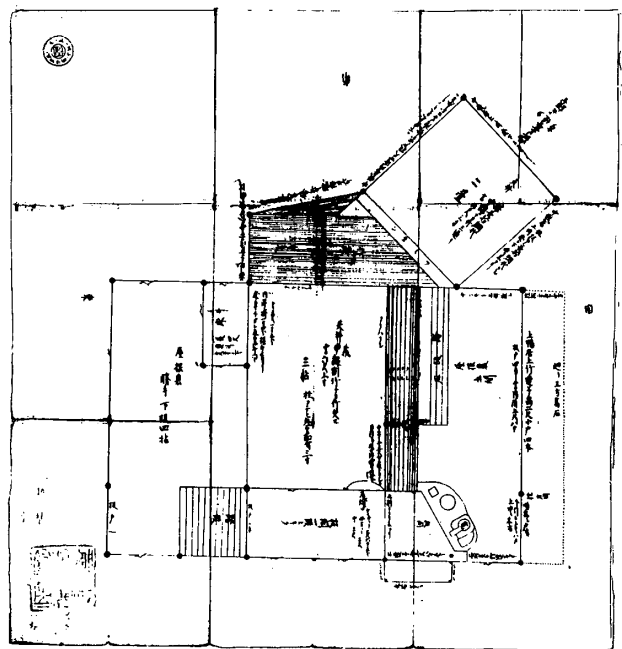
『楽翁起し絵図』に収められる図は，ほぼこのような状況に対応する間取りの起し絵図といってよい。洗解庵写『十八囲之図』（文政7年；国立国会図書館蔵）所収の

鹿苑寺茶屋絵図（第7図参照）は夕佳亭の名は付していないが，「金森宗和好，鹿苑寺ニ有之」としていて，茶屋の構成は『楽翁起し絵図』と大きく変わるものではなく，図の内容からこれは正しく夕佳亭であるといつてよい。

いま，夕佳亭の具体的な状況についてみると，入口は間口2間のうち，左半間を除いて板戸4本の広い入口になっている。入口前面三方を石（第7図では葛石としている）で限り，土段を構成して外回りの露地空間と明確に仕切っている。入口を入ると，そこは土間で，天井は屋根裏仕上げ，縁は竹を挟んだ榑縁（第7図では中央の



第6図 鹿苑寺夕佳亭
（都林泉名勝図会 巻四より）



第7図 夕佳亭平面図
（国立国会図書館蔵，十八囲之図より）

樽縁を挟み、前後に竹縁を配している）で、ここが茶座敷の寄り付きとなっている。縁の踏み上がりの踏石は見事な長大石を横引きの3段に組み上げ、踏段石のかたちをとる。縁の向かって左端には板敷き床が入口に向かって突き出し、これにそえて竈土（へつつい・くど）がつくられている。茶座敷は三畳、正面右寄りに4尺床、左下手の縁寄りには宗和が始めたといわれる火頭口⁽³⁸⁾を設けていた。この火頭口に正対する茶座敷の南側は「アケハナシ」で、その外側にはおよそ1間幅の竹縁を取り付けている。縁の西端には斜めに階段が取り付けられ、踏段を上ればそこが掛け造りで、二畳の上段となっている。

夕佳亭の平面構成をこのようにみると、夕佳亭の入口にみる土間空間は庭玉軒における「内坪」のもつ特性を活かしながら、より自由な心の転換点としての空間構成を目指したものととらえることが出来る。また、中村が指摘するように、竈土が土間の前面につくられていることから、紹鷗の時代に堺の辺で侘び数寄と称して行われた竈土構の有り様に通じるものとみる⁽³⁹⁾ことも出来る。

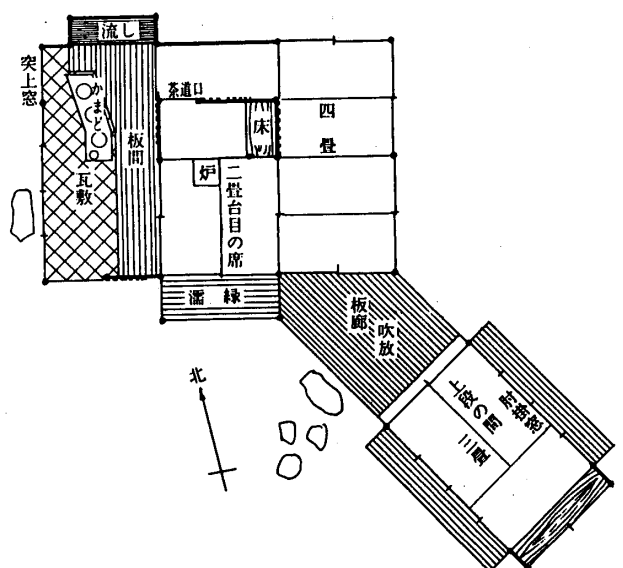
三畳の茶座敷と竹縁で連結する二畳の上段は三方とも中敷居窓で、まこと開放された小間となっている。この掛け造りの座敷からは眺望がよく展けているが、同時に土間あるいは三畳の茶座敷からこの上段をみると、現実の距離にくらべはるかに遠い距離を感じさせ、奥まった上段としての雰囲気をもつ構成となっていて、貴人席にふさわしい部屋の配置がなされていた。このような母屋と竹縁で連結する構造、あるいは貴人席としての上段の構造などに由来するのであろうが、この上段を寛文元年（1661）9月29日の後水尾上皇の御幸に際して付加したものという言い伝えがある。この真偽の吟味は後段にゆずるとして、『隔蓑記』の記録に現れた鳳林承章のこの茶室（ときに茶店とも）の活用のあり方について見ると、それは必ずしも正式の茶会に対応するための場としてではなく、むしろ様々な趣向で客をもてなす場としての利用に、その主眼をおいた茶屋であったと理解される。その意味で、これは鳳林承章がその記録にしばしば用いた“茶店”の語がより相応しいものと考えられる。確証はないが、この夕佳亭が、もし宗和の好んだものとすれば、それは、点茶の場が“様子ヨキ様ニ”また“キウクツニ見えない”ことを以て点茶の心得とした⁽⁴⁰⁾宗和の茶に対する姿勢を具現するひとつの作例ともとらえ得るであろう。

このように見るとき、この夕佳亭は鳳林承章のねらいと、宗和の茶によせる心とがひとつになってつくり上げられた、まことに貴重な作例とみることができる。

東本願寺涉成園（枳殻邸）には、この夕佳亭にその平面図がよく似た茶亭・縮遠亭がある（第8図参照）。村岡は、この縮遠亭について、上段の間を山腹に突き出した構造を取っていて、『枳殻御殿古之記』（東本願寺・園林文庫蔵）に「縮遠亭ハ金閣寺足（即）休亭茶席写」（夕佳亭の扁額には「即休」とある）との書き入れがあり、これによって夕佳亭を模した茶亭であることがわかる⁽⁴¹⁾としている。ところで、涉成園は文政9年（1826）石原長直の編集にかかる『枳殻御殿古実』に「此御殿は明暦三丁酉年（1657）御成就也」とあり、その成立年代が明記されている⁽⁴²⁾。いま、涉成園の成立年代と後水尾上皇の鹿苑寺への御幸、即ち寛文元年とを考え併せるとき、夕佳亭を模して造った縮遠亭に、すでに夕佳亭の上段に相当する掛け造り上段の間が付設されていた事実は、夕佳亭において上皇の御幸以前、さらにいえば夕佳亭の建築当初からすでに上段が付設されていたことを雄弁に物語るものであるといつてよいであろう。

縮遠亭についてさらにいえば、この亭は一庭の重要な見所のひとつとして機能している点である。即ち、たとえ亭内が接客空間として用いられない場合でさえ、庭園鑑賞のための対象としてそれは常に存在するべく計画されたものである。つまり、涉成園にとってこの縮遠亭は不可欠の構成要素として位置付けられたものと言ってよい。それはこの縮遠亭が涉成園十三景の一つとして数えられていることによって明らかであろう。

このことは、夕佳亭が客のもてなしの場として機能することにその存在がおおきく意義づけられ、鹿苑寺庭園の鑑賞の場としてはその存在が極めて小さいものである



第8図 涉成園・縮遠亭平面図
(岡田孝男；京の茶室より)

ことと、まことに対蹠的であるというべきである。即ち、宗和好みの茶屋と露地のもつ造形的特性、つまり様子よく、客に窮屈さを感じさせない茶のための空間構成を目指した宗和の茶における造形は、彼が意図すると否にかかわらず、結果として庭園の見所としてはたらくための園亭を構成するための設計に大きな示唆を与える、そのような素地をもつものであったといつてよいであろう。

4. まとめにかえて

宗和の露地に関する資料として、ここでは2, 3の茶書を取りあげる。

宗和流茶湯書（枝折抄，金森宗和故実）：『槐記』享保15年(1730)4月15日の条に、家熙は加賀前田家より「宗和ノ十三冊ト云書」の寄贈を受けたことを記している。家熙はこの書を「好書」と評価し、これを家熙が茶の伝授を受けた常修院が、つねづね家熙に教えてくれた内容と少しも違いのない内容をもつ書物であったとしていた。現在、国会図書館に所蔵される枝折抄は、この書物を抄録したものであるという。この茶書に類するものとして、金沢市立図書館に所蔵されている『宗和流茶湯書』（上・中・下）があり、また、その内容において酷似するものに『金森宗和故実』（陽明文庫蔵）がある。

いま、『宗和流茶湯書』の中で本論文に直接関連する「露地廻り仕様の事」の段に限って取りあげる。この段は34項目からなり、その第2項には、露地第一の心得は奥へ入る程“しんしんと静かなるやう”に作るべきであるとし、また“露地末より景気（景色）ほのかに見え候は面白”いものであるとしていて、このことから宗和が鑑賞に重きをおいた露地づくりに主眼をおいたことが知れる。

第3項では、露地はすべて、その人の作意次第である。“何方にても一ヶ所人の目とまるやう”に心掛けるべしとされていた。これは利休が露地の心得として“人の目とまらぬがよし”としていた姿勢と大きく異なる志向であった。

第23項では、夜の茶湯での灯籠の扱いについて、月夜には灯影（ほかげ）が白むので、灯心を多く出すことにしていた。家熙が山科道安の問いに答えて“月ノ中ル処ハ灯心多く入ルガ習ナリ”（槐記、享保19年7月16日条）としており、宗和流茶湯書に示す内容とその基本において通じるところが認められ、ここには宗和と公家茶との係わりが読みとれるといつてよいであろう。

茶譜：『茶譜』はその著者、著作年代不明の茶書である⁽⁴³⁾が、その内容から寛文を大きく降らない時代の成立とみ

られる。詳しい成立年代はともあれ、これは織部、遠州、宗和らの茶風を知るうえで、すぐれた茶書の一つといえる。いま、この中から宗和の露地に関する記事の2, 3について取り上げる。

路地の造りよう：大木は深く（多く）は植えず、何れによらず赤い実のなる木を集めて植える。その故は、やがて口切（茶道にとって最も大切な行事）の時季（期）にその実が色づき甚だ赤くなることを期待してのことであつた。このことは、杉えさも色めいて“悪敷”とした利休や“花咲木”は植えるべからずとした織部の露地に対する姿勢⁽⁴⁴⁾とは、かなり異なっていた。

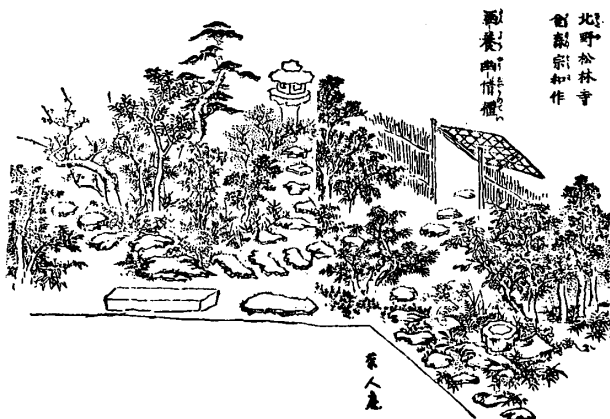
飛石については、御影石、川原石を取り合わせ用いる。飛石の間はすべて川原砂をまく、その大きさは小栗あるいは豆ほどのものとする。手水鉢のまわりは鞠ほどの川石を多く蒔くとしていて、栗石を用いた遠州の作例⁽⁴⁵⁾とはかなりの違いが見られる。

露地の管理：宗和は露地に積もった雪は手をかけるほど汚くみえる。そのため通り道の部分に限って雪を掻き、そのほかは自ずと少しずつ消えるにまかせるをよしとした。遠州はこれに対して、手水鉢のまわりは雪を掻き、ときには雪に松葉を散らして風情をつくるなどしていて、雪の風情に寄せる両者の違いが、ここにも見られる。

次に、茶書ではないが、北村援琴の『築山庭造伝』を取りあげる。その巻之中（享保20年）には金森宗和作の茶人庭として北野松林寺の庭園の姿が描き残されている。これには涵養幽情体としてあり、枝折戸をつけた柴垣に仕切られた、おだやかな風情の庭が描かれていた（第9図参照）。

摘 要

小堀遠州とほぼ同時代に活躍した宗和は、世に『姫宗



第9図 北野松林寺の庭園
（北村援琴；築山庭造伝 巻中より）

和』と呼ばれ、世上で行われた侘び茶とはいささか趣向の異なる茶の世界をつくりだしたといわれる。この論文では、宗和が京師に屏居した理由について、これまで行われた見解とは別に新見解を提示し、この見解を裏づけるものとして、彼が京屋敷に営んだ長四畳の茶室と、ここで行われた茶会の客組を取りあげた。次に、彼の露地においてみられる「内坪」の構えについて取りあげ、それがもつ特性が、やがて園亭の設計の素地として展開した経緯を庭玉軒の「内つくばい」、夕佳亭の土間、縮遠亭の係わりの中で吟味した。ここでは同時に、縮遠亭との係わりから夕佳亭の上段が建築当初から付設されていたであろうことを推測した。さらに宗和と利休、織部、遠州の露地に対する考え方の違いについても2,3の茶書から吟味した。

引用ならびに参考文献

- 1) 新訂寛政重修諸家譜第6, 東京, 統群書類従完成会, 1964, 251-253.
- 2) 佐藤虎雄(1937): 金森宗和(茶道全集 巻の11), 創元社, 大阪, 224-225.
- 3) 中村昌生(1971): 茶匠と建築, 鹿島出版会, 東京, 191-192.
- 4) 佐藤虎雄: 前出, 225.
- 5) 同上, 227.
- 6) 柴田 実校注(1956): 槐記(茶道古典全集第5巻), 淡交社, 京都, 224.
- 7) 佐藤虎雄: 前出, 227.
- 8) 佐藤小吉, 佐藤虎雄校注(1956): 長閑堂記(茶道古典全集第3巻), 淡交社, 京都, 371.
- 9) 永島福太郎校注(1956): 松屋會記(茶道古典全集第9巻), 淡交社, 京都, 195.
- 10) 同上, 197.
- 11) 中村昌生編著(1988): 数寄屋古典集成3 わび茶の作風, 茶譜一, 小学館, 東京, 29.
- 12) 佐藤虎雄: 前出, 224.
- 13) 川島将生(1973): 金森宗和覚書: 研究と資料-茶の湯, 第7号, 35-36.
- 14) 永島福太郎校注(1956): 松屋會記, 前出, 339.
- 15) 茶譜一, 前出, 29.
- 16) 谷端昭夫(1988): 近世茶道史, 淡交社, 京都, 107.
- 17) 中村昌生(1975): 茶匠と建築, 前出, 194-195.
- 18) 2 安楽庵策伝著・鈴木棠三訳(1987): 醒睡笑, 平凡社, 東京, 3.
- 19) 永島福太郎校注(1956): 松屋會記, 前出, 264-267.
- 20) 都名所図会 巻之一, 「誓願寺」の項
- 21) 中村昌生(1971): 茶匠と建築, 前出, 195.
- 22) 安楽庵策伝著・鈴木棠三訳(1987): 醒睡笑, 前出, 264-269.
- 23) 中村昌生(1971): 茶匠と建築, 前出, 194-195
- 24) 安楽庵策伝著・鈴木棠三訳(1987): 醒睡笑, 前出, 268-269
- 25) 永島福太郎校注(1956): 松屋會記, 前出, 339-340.
- 26) 同上, 195.
- 27) 同上, 432.
- 28) 浅野二郎ほか(1986): わび茶と露地の変遷に関する史的考察—その3: 遠州における継承と創造, 千葉大園学報第38, 61-62.
- 29) 同一—その4: 台目構の成立と露地の展開—, 千葉大園学報39, 118-120.
- 30) 中村昌生(1971): 茶匠と建築, 前出, 199.
- 31) 森 蘊(1954): 修学院離宮の復原的研究(奈良国立文化財研究所学報 第2冊), 養徳社, 奈良, 17-18.
- 32) 中村昌生(1971): 茶室の研究, 墨水書房, 東京, 548.
- 33) 佐藤虎雄(1937): 前出, 238-239.
- 34) 堀口捨己監修(1965): 茶室起し絵図集第7集解説, 墨水書房, 東京, 70.
- 35) 赤松俊秀編纂(1938): 隔簾記 第一, 鹿苑寺, 京都, 76.
- 36) 中村昌生(1971): 茶室の研究, 前出, 545.
- 37) 同上, 534.
- 38) 桑田忠親編(1958): 茶道辞典, 東京堂, 東京, 254.
- 39) 中村昌生(1971): 茶室の研究, 前出, 541.
- 40) 村岡 正(1987): 涉成園の歴史(京都大学造園学研究室編; 造園の歴史と文化) 養賢堂, 東京, 107.
- 42) 同上, 92.
- 43) 中村昌生編著(1988): 数寄屋古典集成3 わび茶の作風, 茶譜一, 前出, 271.
- 44) 浅野二郎ほか(1986): 茶庭(露地)における植栽の変遷に関する史的考察, 造園雑誌49巻5号, 61-65.
- 45) 浅野二郎ほか(1986): わび茶と露地(茶庭)の変遷に関する史的考察—その3: 遠州における継承と創造, 前出.